

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

墓たまには負ける口喧嘩 斉藤久美子

墓の面構えをふてぶてしいと感じ、「この墓にだけは口喧嘩をしても勝てない。墓以外だったら負けないのに」と思ったのかもしれない。そうではなく、いつもは勝っている口喧嘩にたまたま負けたことから、墓を引き合いに出し、悔しさを墓に象徴させているのかもしれない。いずれにせよ、墓は動じない。墓は不言実行派である。

吟行は季語の宝庫や若葉風 佐藤 和子

家の中でも家の周辺でも季語は宝庫のように在るが、いつもの風景とは異なる場所へ行くと、ありふれた植物や動物でも新鮮に感じられることがある。そうなれば、ここも季語の宝庫である。五月の心地良い風を感じながら、興味を持ったものからゆつくり観察するといひ。

ふらここを漕ぐ忘れよう忘れまい 島 昌子

心の動揺が「忘れよう忘れまい」の措辞から窺える。ぶらんこを漕ぐことで忘れようとしたのが、ぶらんこの揺れで「忘れまい」の気持ちに傾き、そしてまた「忘れ

よう」に戻っていく。その辺りの人間の心の機微、切なさがよく語られている一句。

梯姑咲く逝きし命の色で咲く 嶋谷 宗泰

作品の全句が沖繩忌を詠む。沖繩の梟花である梯姑は深い紅色で、溢れる生命力を秘め、それはまた沖繩女性の情熱を思わせる。この句はその色を沖繩戦で逝った多くの島民の「命の色」と謳い、尊い人の命を見つめる。二句目の「乙女らの泪のかたち月桃花」も同様。へ血の色でいくさ見てきし老梯姑 平良雅景。

宿運と諾ひ生きて三尺寝 清水 悠太

加齢化による心身の衰えは、本人が一番よく解かっている。それを宿運と決め、普通は諦めてしまうものだが、この句では「諾ひ」の後に「生きて」とある。諦めつつも、確り生きていこうという気持ちが出ているのではないか。三尺寝は、作者の生命力の維持回復を前提とした休憩であると理解したい。

薔薇の門潜りて薔薇の精となる 首藤 久枝

薔薇の美しさに惹かれ薔薇の門を潜り、とうとう薔薇の精となったという。他念なく邪念なく素直に薔薇の香に身をひたしたからこそ、薔薇の精になれたのだろう。

薔薇が作者を呼んだということもある。選ばれて薔薇の精になったのだ。こうなればもう薔薇の精として句作に励むしかない。香り良き句に出会わんことを。

生活の音の消えゆく夏の雨 正田 和子

時に激しく降った雨。「生活の音の消えゆく」の生活の音とは、お勝手で水を使う音であり、洗濯機や扇風機 of 回る音、テレビの音、家族団欒の声など。「夏の雨」は、五月雨や夕立のような特徴を持たない、通常の雨。作者は生活の音と夏の雨とを聴き比べている。

姉逝きて滴る山に鳩が鳴く 新海あぐり

作品の表題が「姉が消えた」。作品全体が姉追悼の心で詠まれている。「山滴る」の季節に入つての姉の死。その現実には現実として受け止めながら、作者は「滴る山に鳩が鳴く」と、嘆き悲しみを、鳩の声を通じ濾過している。「鳩が鳴く」に詩があり、哀しみがある。

初夏の富士や不滅の巨人軍 杉淵真喜子

「不滅の巨人軍」は、6月3日に89歳で亡くなった長嶋茂雄が引退セレモニーの中で述べた言葉。死後多くの追悼句・追悼歌が全国で作られている。この句では「初夏の富士」即ち泰然たる五月富士を以て追悼している。

行く春の入浴剤に土星の輪 高橋 章子

土星の輪が真横になったためにその輪が今は見えないという。その土星の輪を作者は面白く一句に詠んだ。お風呂の入浴剤として土星の輪を浴槽に入れたのは、地球では高橋さんしかいないだろう。浮袋のように作者を囲み、少しずつ溶けていく。行く春を惜しむかのように。

白つつじ朽色に散り夢の跡 高橋満利子

盛りを過ぎ、朽ちて散る白躑躅をいとしく思う句だ。白だけに朽ちが目立つ。兵どもが夢の跡と同じようにこの躑躅への哀惜の情が色濃く表出されている。

春昼や惚けし吾の日々快楽 高橋美智子

具象が見えない分、どのように惚け、その惚けがどう快楽に変化するのか、読者に想像させる余地がある。春昼の長閑な明るさは、人を快楽へと導くらしい。

薫風や総身さらして丘に佇つ 竹森 美喜

高浜虚子が一大決心して俳壇へ復帰する際の句へ春風や闘志いだきて丘に立つに敬意を表しての一句。「闘志いだきて」とは言っていないが、総身を薫風にさらす作者が、行く方への強い志を抱いていることは明らかだ。老いという未知の領域に踏む込む決意が「丘に佇つ」。

平日はイカ焼き休み花見山 田中 京

平日の花見遊山。土曜日曜には営業している露店が、生憎この日は休みで、イカ焼きの煙も立っていないければ匂いもない。特別イカ焼きが好きでもないだろうに、「イカ焼き休み」の貼紙を見た途端に若干の物足りなさを感じたのだ。そういうことも俳句になるという好例。

ほととぎす 天水田てんすいでんの空遠く 寺田 幸子

カール・ブッセの「山のアなたの空遠く…」の詩が思い出される。天水田は、水源を持たず天から降ってきた雨水のみを頼りにする田。その自然のままの水田の空の上に、ほととぎすが飛んでいく。賑やかな鳴き声も聞こえてくる。何か懐かしい風景。

夕桜異なる国の人々と 長井 敦子

花見の季節に限らず、円安の経済状況を背景に外国の方々が我が日本を訪れてくれる。浅草を歩いていても日本人観光客よりも多く、外国に来てしまったのかと錯覚することも度々。外国に出掛けることは恐らくもう無いので、ぼくは多くの外国の方々と町で一緒になることは反って嬉しい。無料で外国旅行しているみたいだ。この作者も夕桜と一緒に楽しんでいる。「異なる国の人々と」の友好的な表現には心休まるものがある。

嵐寛寿郎アラカシや夏の校庭映写会 中嶋きよし

映画俳優の「アラカン」こと嵐寛寿郎。鞍馬天狗などの時代劇に長く出演し、晩年は「網走番外地」シリーズにも出て存在感を示した。そのアラカン主演の映画が夏の一夜、校庭にて上映された。作者の思い出の映写会だったのだろう。こういう記憶も句に残しておきたい。

梅干になるかならぬか漬けてみる 中村 敬子

「なるかならぬか」は各地に伝わる小正月の豊作祈願の習俗「成木責」。「なるかならぬか、ならねば切るぞ」と責め「なります、なります」と返答する。その「なるかならぬか」の言葉を借り、この句では梅の実に対して梅干に成るよう責めながら梅を漬ける。何とも惚けたウイットのある句で、深い境地が感じられる。

水晶の山のふところ螢川 中村 東子

岩肌に水晶を含み、きらきら輝く水晶山。山岳信仰の霊山として古い歴史を持つている。この句はその山懐を流れる川がいよいよ螢川となり、訪れる人の目を楽しませてくれる場面を詠む。言葉を惜しみシンプルな一句に。

母の日のあれもこもみな母の跡 中村 幹子

「あれもこも」は「あれもこれも」。母の日を迎えあら

ためて家の中を眺めてみると、衣類のみならず茶碗から皿、茶箆筒、食器棚、食卓、靴などに至るまで、母の思いに繋がる気配がする。「みな母の跡」は母恋いの措辞。

通るさにそこはかとなくバラ香る 野沢 慶子

薔薇の香りが、その辺りを通った時に感じられた。それも「そこはかとなく」。どこということもなく香りが漂ってきたのだ。これこそ薔薇という香り。「通るさに」とそれに続くサ行「そ」の言葉の繋がりが滑らかで、響きもよい。格調高い句に仕上がった。

おむすび屋客途切れざる薄暑かな 野村 雅美

おむすびは茶碗大盛り一杯分の飯で作った大きなものもあるし、小さなおむすびもあり多種多様。現代の携帯食として吟行時にも短時間で食べられ、とても便利である。この句のように「客途切れざる」には嘘がない。薄暑の時間帯でも行列ができる。

ワイルドに朝採りとまと齧り付き 橋本かをる

朝採ったばかりのトマトにがぶり齧りついたというだけの句だが、その荒々しく粗野な様子を英語のワイルドを用いて句作したのがワイルドでいい。勿論、何でも英語が入ればいいというものでもないが。

トンネルへ散る遅桜百閒忌 橋本 恭子

漱石門で小説家・随筆家・俳人の内田百閒の忌日は、四月二十日。「安房列車」などの随筆は今でも広く読まれている。列車旅を通じて百閒はトンネルを数えきれないほど抜けただろう。この句はその百閒の旅を偲び、トンネルへ遅桜を散らす。実際に列車の通過とともに散ったのだろうが、遅れて咲き出した桜だけに哀れも一入。

スタンドに給油に来しか夏燕 長谷川菊男

雛を育てるために、忙しく飛び交う燕。さすがに油が切れて、この句ではガソリンスタンドに寄り給油してもらっている。勿論、これは作者の寓話。「給油に来しか」は機智で、日頃の童心から生まれた。

牛蛙鳴いて娘を怖がらす 長谷部幸子

地から轟くあの牛蛙の鳴き声。この句「娘を怖がらす」というリアルな表現が、娘の怖がる表情や声、仕草を想像させる。想像の余地を残す句は強い。

夏鶯老いて良きことまた一つ 畠山 奈於

〈桜満つ電動歩行器試す夫〉〈帰国子の舌喜ばす若竹煮〉がこの句の前にある。前向きで明るい句を作られる。「老いて良きことまた一つ」の感慨は尤もである。

風送る扇子に幼手を伸ばし 浜田 優子

幼子は物の動きに敏感だ。いや、幼子に限らず人間は動きに興味を持つ。映画の出発は動く蒸気機関車の映像だった。この幼子は扇子のそよぎを不思議に思い、そのそよぎから来る風を涼しく思っただろう。未知のものに手を伸ばすこの子の未来に乾杯。「手を伸ばし」の明るさが暗い浮世を照らしてくれるようにも感ずる。

筍のゴロンと朝の流し台 原田ミチ子

掘りたての土の着いた大きな筍だ。これを先ず洗うため、流し台の中へ無雑作に置いた。砲弾のような筍だから、それだけで流し台は満杯だ。その筍の様子が「ゴロンと」。ゴロンで筍の大きさを質量感が伝わってくる。皮を剥いたり、大変な調理がこれから始まる。そういう朝。

敗色の色濃き晩年花菖蒲 春田 千歳

晩年意識の強い一句。それも「敗色の色濃き晩年」と謳う。敗色の色濃きというと太平洋戦争末期の我が国のように、それを個人の晩年に置き換えたところが哀しくもある。花菖蒲を見ながら、花菖蒲と相対しながら、その花の色から作者自身の敗色の色を感じ取っているが、まだ晩年は始まったばかりである。「配色は濃厚がいい」と言葉を置き換えてみたらどうかと、これは老婆心。

眠りし小鳥を拾ふ五月の朝 平野 美子

すでに息絶えた小さな鳥を「眠りし小鳥」と表現しこの句は詩に昇華した。その小鳥を手に拾い、短い命を思う。頃は五月のとある朝。五月はマリアの月で、すこやかな朝の空気が小鳥の魂を鎮める。祈りの句。

千足屋プリンに破顔母の日よ 藤沢 佑吉

母に食べさせたい一心で買ったのだろう。銀座千足屋の銀座プリン。フルーツソースを使い、味わい良く食感もなめらかという。母の喜び、その破顔。作者も心安らいだことだろう。

パスタどれもはじかれ豆の飯 本多 遊子

面白いことを句にしたものだ。設定していた自分のパスタを忘れてしまい、記憶のままに幾つかパスタを打つが、いずれも弾かれてしまい次のステージに進むことが出来ない。映画では他人のパスタで侵入する場面でこのような「どれもはじかれ」が見られる。「豆の飯」との取合せの句で、「はじき」と「豆」が巧み。

夏来る棚田に雨のひとしきり 松本 直方

雨が一頻り降っただけなのに、何と沈静した句なのだろう。階段状の小さな棚田にさあっと降って、じめじめ

せず、からつと上がる。夏の趣が窺える一句。

丸見えの手のひらほどの雀の巢 持田きよえ

雀の巢が手の平ほどの大ききで、それが人の目にも見えるということはこの句から教えてもらった。「丸見え」から可愛い子雀たちの姿も想像できる。

ゴリラ・象・吾もこしへにバナナ好き 森尻 禮子

バナナは毎日食べているが、夏の季語なのが難。やつと夏に入り、バナナを堂々と季語に用いることが出来る。この句もバナナをゴリラ、象、作者自身にも分かち与えて、夏の到来を伝える。「とこしへにバナナ好き」と言い放ちバナナ愛はこれからも続く。

校舎よりラッパの音や青葉風 山田 雅子

吹奏楽部とかジャズ研の生徒のラッパの音。放課後の閑散とした校庭に、空気を引き裂くように一筋の鋭い音が響く。この句は何と言つても「青葉風」。若々しく、たくましい風だ。

青梅雨や泣くために観るドラマあり 横須賀智子

少年時代、母に付き合つてその当時「昼メロ」といわれていた哀しいドラマを見ていた。苦勞しながらも一生

懸命生きている若い女性が理不尽にいじめられる。泣きはしなかったが、社会には暗部があることを臆げながら知ることになった。掲出の句では、泣くことを前提にドラマを観ると詠んでいる。常に泣きたい境遇にいらつしやるのだろう。「青梅雨」は新緑に降りそそぐ梅雨の意で色彩が美しい。この青梅雨みたいに泣けるといい。

司令部の壕に滴る夏至の雨 和田 郁子

作品の表題が「慰霊の日」で、この句は沖繩戦の軍司令部を詠む。昭和20年5月28日、首里市の大部分が米軍の手に落ち、首里城内の日本軍司令部は南部へ撤退。摩文仁村の海岸洞窟へ移動した。しかし米軍の艦砲射撃などの攻勢により沖繩は県民を巻き込んで生地獄と化す。そして牛島軍司令官、長参謀長の自決を以て、八十余日にわたる沖繩戦は6月23日閉幕した。それから八十年。この句の「夏至の雨」は何か県民の涙雨のようで切ない。

天牛のしなる触角青つるぎ 阿部 草薫

天牛は「かみきり虫」。長い触角を持ち、髪の毛を切るというのでこの名が付いたという。この句ではその触角を「しなる」と描写し、また「青つるぎ」の形をしていると詠む。作者の亡父は晩年八ヶ岳山麓に「諏訪クワガタ昆虫館」を開いた方。天牛はその繋がりなのだろう。

鷹化して鳩に夫焼く葡萄パン 伊澤やす系

「鷹化して鳩と為る」が春の季語。私は一度（鷹化して鳩に鳩からサブレーに）と、この季語で遊んだことがあるが、掲出句は真面目で堅実。「夫焼く葡萄パン」が仄々としていて鳩に優しい。

慈悲垂るるほたるぶくろの阿弥陀さま 市村 啓子

蛍袋を見た感慨を詠む。「慈悲垂るる」は蛍袋の下を向いた形を言っている。慈悲に満ちているということでもある。そして、その袋が「阿弥陀さま」のようだと句全体が極楽浄土を願っているみたいだ。

鳶若葉伝ひて天へ逝きたまふ 牛込はる子

四月に急逝した閏埼玉句会の大塚忠孝さん追悼の一句。植木職として最後まで職を全うされた。鳶若葉こそは、大塚さんを象徴する言葉だろう。その鳶若葉を伝わって天に召された大塚さん。「逝きたまふ」に合掌。

思ひ出の父夏服は処分せず 内海 範子

断捨離をしているわけでもないだろうが、箆笥の中の父の夏服が今でも気になる。処分しようかと思うこともある。でも結局は処分せず、そのままに。夏服に父の思い出、若き父の姿が染みついている。父恋いの一句だ。

白雲の洋々と来て日傘たる 大下 壽櫻

これぞ日傘だという存在感を示す。この句、「白雲の洋々と来て」の次に「こそ」が隠れているのだ。日傘には、それ相応の立派な夏の白雲が出ていなくてはいい。日傘は勿論、白日傘。

コンクラーベにやつと白煙聖五月 太田 裕子

全カトリック教会の最高司祭であるローマ教皇を枢機卿による投票で選出するコンクラーベ。明け方、白煙が上がり新教皇が決まったことが判る。この句は「やつと白煙」が作者の安堵を示している。映画の『天使と悪魔』（ロン・ハワード監督・トム・ハンクス主演／2009年）のラストでもこの白煙が上がり、市民は歓喜した。

いろは丸事件無きがにいかを釣り 大和田いそ子

慶応三年の四月、坂本龍馬の率いる海援隊がイギリス造船の蒸気船「いろは丸」を仕立て長崎を出航したところ、深夜に瀬戸内海で紀州藩の蒸気船「明光丸」と衝突し沈没。これが訴訟事件へと発展。龍馬は駆引きで八万両余の賠償金を勝ち取った。百年後にその船が海底に見つかり調査されたが、龍馬が積載していたと主張した最新式のミニエール銃400挺が発見されなかった。今は何事もなく漁船が烏賊を釣っているという、雄大な句。

囀りと紛ふ口笛女の子 小河原政子

女の子の吹く口笛の高い音色。それを鳥の囀る声と思っていたが、そうでないと解かったときの驚き。それを一句に仕立てた。今は亡き江戸家猫八の囀りの声がい出される。

ドリアンの氷菓ただく博覧会 小野 直美

大阪・関西万博を詠んだ作品群。一句目の「みなみかぜ大屋根リング吹き抜ける」は堂々としていて万博会場が目に浮かぶ。掲出の句には、一通り見学した後の憩いの氷菓が登場。ドリアンの氷菓で涼んでいる。「博覧会」で句を結び余情が生まれた。

春愁のきのふも今日も窓を拭き 金子かほる

春の愁いというのは捉えどころのない愁い。これといった理由もないので、過ぎ去るのをただ待つしかない。いつもの通り、毎日せつせと窓を拭き、与えられた日常に従う。そうこうしている内に会話も明るくなり冗談に対しても冗談を返すことが出来てくる。明日には春愁を脱するかもしれない。

睡蓮咲く池には河童居るなもし 金田 知子

「なもし」とい愛媛の言葉を用いて面白い句になった。

ナは念押し終助詞で、モシは「申し」で敬意が籠められている。この「なもし」により睡蓮の池に棲むという河童が可愛らしく思えるから不思議である。

年を経て琥珀色なり梅酒飲む 金田 喜子

年代物の梅酒の琥珀色を詠む。梅酒を作る家ではその幾種類かの年代の異なった梅酒を、その日の好みでブレンドして飲むという。是枝裕和監督の『海街diary』という映画でそれを知った。そこまではいかなくても、この古酒の琥珀色を愉しむだけでも生活が潤うのではないか。羨ましく思った一句。

水底に潜みしニンフ未草 北 好夫

ニンフはギリシャ神話に出て来る妖精で、若く美しい女性の姿をしているという。池の上に咲く睡蓮から作者はニンフの存在を確信したのか。睡蓮の花の間よりニンフが作者に笑いかける。この想像力が愉しい。

新茶汲む急須に蓋の無き急須 木山 有衣

「蓋の無い急須」のメリットとして割れにくい、軽い、茶殻が捨てやすい、茶葉の状態・湯量が確認しやすいということがいわれている。それは兎も角「急須に蓋の無き急須」の語感が滑らか。美味しい新茶が味わえそう。

棚立てて朝顔芝居の柀が入る 久保田勝一

朝顔を育てるための棚。そこに朝顔の蔓を巻き付け
る。棚を立てて作者は何やら晴れ晴れとした気分になつ
た。棚が朝顔の咲く出発点だからだ。それ故、待つてま
したと芝居の柀が入る。柀を入れた以上、綺麗に咲かぬ
ばなるめえ。

扇より翔たむばかりや兜太文字 栗原 季星

金子兜太だけは兜太兜太と呼び捨てに出来る。そうい
う親しみがある。この句の「兜太文字」も親しみを籠め
て「兜太」と呼び捨てだ。扇子に兜太の句が直筆で書か
れているのだろう。なにせ「俳諧有情」の俳人。一字一
字が奔放で様になる。「翔たむばかり」はその通り。故
郷では兜太のことを「秩父のピカソ」と親しみを籠めて
言うそうだ。〈よく眠る夢の枯野が青むまで 兜太〉

アマリリス開く明るき知らせとも 小泉まり子

〈空豆のゆで立てを食べ癌に生く〉の今の作者。でも
句は明るい。〈六月の軽やかな風オーボエ聞く〉〈鳥が種
運びてふやす花菱〉。掲出句もアマリリスの開花を「明る
き知らせとも」と詠み屈託がない。〈新茶汲む一日無事に
過ぎにけり〉と、一日一日を大切に過ごされている様子。
猛暑につきくれぐれもお大事に。

通り雨ばらばらアスパラガス咲いた 幸喜美恵子

「ばらばらアスパラガス」の「ばら」の韻を踏んでい
る音の心地良さがこの句ではとても貴重である。しかも
完成した句を見ると、この通り雨が一頻り降つてアスパ
ラガスを咲かせたようにも思える。歌人の馬場あき子さ
んが今年の二月に語つた言葉を思い出した。〈より良い
歌を詠むためには「言葉を砥石にかけること」。この表
現でいいのか、上句と下句のつながりは適切か、何度も
考え、直していく〉と。幸喜さんの句に学びたい。

初夏の古都我もすつかり異邦人 小濱けえ子

京都で多くの外国人観光客に囲まれての一句。「われ
もすつかり異邦人」に共鳴する。こちらから外国に行か
なくても、島国の日本で外国の方に接することが出来る
のだから、慣れれば楽しい。

菖蒲風呂父のおどけのうれしくて 小林ゆきお

もう一句、〈蒙古斑やいと打たるる菖蒲風呂〉もある。
いずれも昔日の五月の節供を詠んでいる。菖蒲湯で父が
「おどけ」て寛いでいる様子。厳格だったかもしれない
父の別の一面に接し「うれしく」思ったこと。湯に浮か
ぶ菖蒲の匂い。想い出は美しく尽きない。

けさの一句

2025.5.14

大筍竹となること定まりし

山田 榎

食用となる筍は、地面から出るか出ないかほどの先端を見つけて掘り出す。いったん地上に出て日を浴びてしまえば、数日で子の背丈を抜くほどの勢いで成長する。力強く土を割り、獣じみた皮をまとい、太く突き出た円すい形の大筍。張り巡らせた竹の根に支えられ、もはや人間にも獣にも掘り返される心配は無用である。次第に硬い皮を脱ぎ、若竹色の輝くような地肌を見せる日も近い。「梟(ふくろう)」同人。 土肥 あき子(俳人)

(5月14日付「信濃毎日新聞」より転載)

〈閨の仲間たち〉

桜絵巻

平野 美子

桜満つ茶房の窓のどの窓も
自転車が桜絵巻を走り抜け
影あるを気づく幼子聖五月
魂をふにやりとさせる仔猫かな
蛍の夜人ひんやりと擦れ違ふ
夜のプール象牙のやうな脚に会ふ
鶏ほめて卵をもらふ野分晴
シンクに寄りてセロリ食む夫退職す

(「俳句四季」令和7年5月号より転載)